

令和 2 年 6 月 22 日現在

機関番号：14202

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K12462

研究課題名(和文) 精神看護における治療的関係のマネジメント力を育むシミュレーション教育モデルの構築

研究課題名(英文) Development of the Simulated Educational Model for Management of Therapeutic Relationships in Psychiatric Nursing

研究代表者

河村 奈美子(大西) (Kawamura, Namiko)

滋賀医科大学・医学部・教授

研究者番号：50344560

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、精神看護学におけるシミュレーション演習における看護学生の気づきや学びから評価を得ること、また、臨床指導者レベルにある看護師の患者－看護師関係に関する意識を明確にすることである。シミュレーション演習の経験後の看護大学生の気づきや感想の記載内容や看護師のインタビュー内容をKHCoder Ver.3.0、質的帰納的分析により分析した。学生はシミュレーションの課題を繰り返し経験するにつれ、他者の視点を獲得し、観察により、場面を俯瞰する力を獲得していると考えられた。看護師は、経験を通して自分なりの距離感を獲得していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、精神医療の大きな課題としてはクライエントとの早期回復と社会参加、就労継続を積極的にすすめる高度な実践技術が要求され、看護学生もまた専門的で実践的な精神看護技術の学習を求められている。このような緊急の課題を踏まえ、本研究の成果は、精神看護学の演習の教育方法の検討、また学生の実習に対する過度の緊張感や恐怖心をどのように減らすことができるかという、実習導入として考える際の資料となる。さらに、新人教育や実践のさらなるスキルアップやトレーニングを構築する際の資料となると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to use a simulated nurse-patient communication at the end of a psychiatric nursing course to investigate the perspectives of nursing students and the perspective of specialist nurses in Japanese nurse-patient relationships. That is, The students had basic nursing skills experience but not long-term clinical nursing practice. Students who played the role of observers wrote notes on a note sheet during each session. A total of 44 memo sheets (collection rate, 73.0%) were collected and analyzed using text mining software (KHCoder, ver.3). Students tended to pay attention to the patient's superficial atmosphere and reaction in the first half session. Gradually, the students tried to understand the reasons, feelings, thoughts, and lifestyles of patients who refused treatment. Experience has revealed that experienced nurses have acquired the timing to notice the relationship with the patient.

研究分野：精神看護学

キーワード：コミュニケーション 患者－看護師関係 精神看護 看護 治療的関係 シミュレーション マネジメント

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

精神保健医療に従事する看護師には、クライアントの理解と支援や他職種を含むチームの協働するための専門的技術として質の高いコミュニケーション技術が要求されている。それは精神科看護師によるクライアントの発達段階や自我構造、自我の状態、疾患のレベルや症状、生活の文脈をふまえた査定に基づく多面的な理解と、看護師とクライアントとの関係性を客観的にとらえ、信頼関係を基盤にした専門的で治療的なコミュニケーション技術である。このコミュニケーションについて Peplau (1952) は関係が治療的であることの重要性を強調し、その後多くの研究でこの治療的関係 (therapeutic relationship) の概念が研究されてきた。鈴木 (1998) は看護師 - 患者関係の心的距離感について、巻き込まれる、気持ちの共有、壁的、遠のきの4つを指摘し、香月 (2009) は精神科看護師の心理的距離と経験年数との相関を指摘している。国外では治療的看護師 - 患者関係を involvement という概念で説明する研究が多く、Arnold (1999) は「therapeutic (治療的) involvement」を中心に両側に「detachment (切り離された)」と「overinvolved (巻き込まれすぎ)」とを位置づけており、Turner (1999) はがん看護師と患者との関係の構成要素の研究において、involvement のマネジメントの重要性と共に、経験豊富な看護師の involvement と over-involvement との境界設定や、切り替え (Switching Off) の活用について見出している。さらに、このマネジメントには関係の気づきとコントロール力が必要であると指摘し、これについて学習可能な側面であることも述べている。また、治療的関係構築に重要な要素については、思いやり、尊重、誠実、共感、自己開示、ユーモアなどがあげられている。

現在、精神医療の大きな課題としてはクライアントの早期回復と社会参加、就労継続を積極的にすすめる高度な実践技術が要求され、看護学生もまた専門的で実践的な精神看護技術の学習を求められている。このような緊急の課題を踏まえ、申請者は、これまでの共感性の獲得に視点を置いたシミュレーション教育をさらに発展させ、治療的関係構築の実践力を育むシミュレーション教育のモデルの提案を目指して、取り組んでいる。今回は、シミュレーション教育に参加する学生の評価をえること、また、精神看護学領域における学生と臨床看護師の患者 - 看護師の関係性に対する視点を探ることを目的とし、参加する指導者や専門看護師等が相互に学び合える構造を検討することを目指した。

### 2. 研究の目的

精神看護学の演習として実施してきたシミュレーション演習における看護学生の気づきや学び、臨床指導者レベルにある看護師の自らの看護実践における患者看護師関係に関する意識を明確にすることにより、学生が学習可能な患者 - 看護師関係における課題について明らかにする。

### 3. 研究の方法

#### (1) シミュレーション演習における学生の学びの解明

研究デザイン：質的記述的研究 (記載された感想の質的分析)

- 対象者：同様のシミュレーション演習を経験した大学の看護大学生 60 名に研究の依頼を行い、協力の得られた 44 名を本研究の対象者とした (回収率 73.0%)。
- 研究方法：データ収集期間は平成 29 年 11 月～12 月研究期間  
実習直前の演習科目の最終回に位置づけられるシミュレーション教育において、学生は感想や気づきに関してメモを取り、その原本は学生に返却されるが、同意の得られた学生には原本のコピーを無記名の状態 (個人情報を切り取った状態) にして回収ボックスに投函するように依頼した。本研究ではこのメモのコピーを分析対象とし、協力の可否が成績や評価に一切影響しないこと、投函をもって研究への協力とみなすことについて周知した。

#### (2) 指導者レベルにある看護師の患者との関係に関する意識の解明

研究デザイン：質的記述的研究

研究方法

- 対象者：精神科病院において勤務し、看護学実習の指導者としての経験を持つ 4 名
- データ収集期間：平成 30 年 2 月～3 月
- 方法：半構造化インタビューを実施 (所要時間は 40 - 60 分) した。対象者の希望により職場等のプライバシーの確保が可能な静かな個室を利用した。インタビュー内容は、シミュレーション教育に参加した気づきや感想、学生 - 患者の関係性に関する気づき、関係性を構築する際の要素や関係調整能力に関する気づき、シミュレーション教育に関する気づきに着目する。
- データの分析方法：インタビュー終了後に逐語録を作成し、データとした。得られたデータは患者との距離の持ち方に関する内容を抽出し分析を実施した。データは方言的表現を共通語への修正を行った後分析を実施した。データはテキストマイニングソフト KHCoder. Ver. 3.0 を用いて分析および、M-GTA に基づき内容分析を行った。
- 本研究は、研究者の所属する機関における倫理審査看護研究専門小委員会の承認を得て実施した。

### (3) 研究の倫理的配慮

滋賀医科大学看護研究専門小委員会の審査を受け学長の許可を得て実施した。(K30-008) 対象者に研究の目的、意義、方法、参加は自由であること、途中でも参加を辞退できること、参加しなくても不利益を被ることはないことを伝え同意を得た。尚、本研究は研究者の所属大学の倫理委員会の審査を受け、承認を得た後に行った。

## 4. 研究成果

### (1) シミュレーション演習における学生の学びの解明

研究依頼を行った学生から提出されたメモ 44 部のすべてを本研究の分析対象とした。1 回分のメモには、44~270 文字 (平均 126.5 文字) の記載がみられた。対象学生は、6 回のロールプレイの中で患者役または看護学生役のどちらかを 1~2 回経験していた。患者役を経験した学生は 26 名おり 28 件の記載が得られた。看護学生役を経験した学生は、24 名で 25 件の記載が得られた。すべての学生が観察者を 4~5 回 (平均回数 4.8 回) 経験しており、210 件の記載が得られた。

テキストマイニング分析ソフト KHCoder (Ver) .3.0 を用いた分析の結果、データテキストからの語の抽出の際に、単体では意味の付与が困難な「いる」「ある」等の言葉、また一般的な語である「思う」「感じる」「できる」等の言葉については、文章を確認し、抽出から除いて分析を進めた。

#### 学生が担当した役割によるメモ内容の傾向

対象学生のメモから得られた 210 件の記載について、それぞれの記載と記載時に担当した役割と担当回を変数にし、対応分析を行った。説明率は、成分 1 は 62.88%、成分 2 は 37.12% となった。樋口<sup>13)</sup>によれば、0 付近に配置されている抽出語はどのような文にも出現しており、特に特徴のない抽出語とみなすことができるとされている。

また、0 から離れている抽出語は特徴的なものであると解釈される。学生 (看護学生役) の近くには「難しい」「考える」「大切」等が配置され、患者の近くには「答える」「学生」「自分」「反応」等、観察者の近くには、「発言」「共感」「聞ける」等が配置されている。図 1. に対応分析結果を示す。

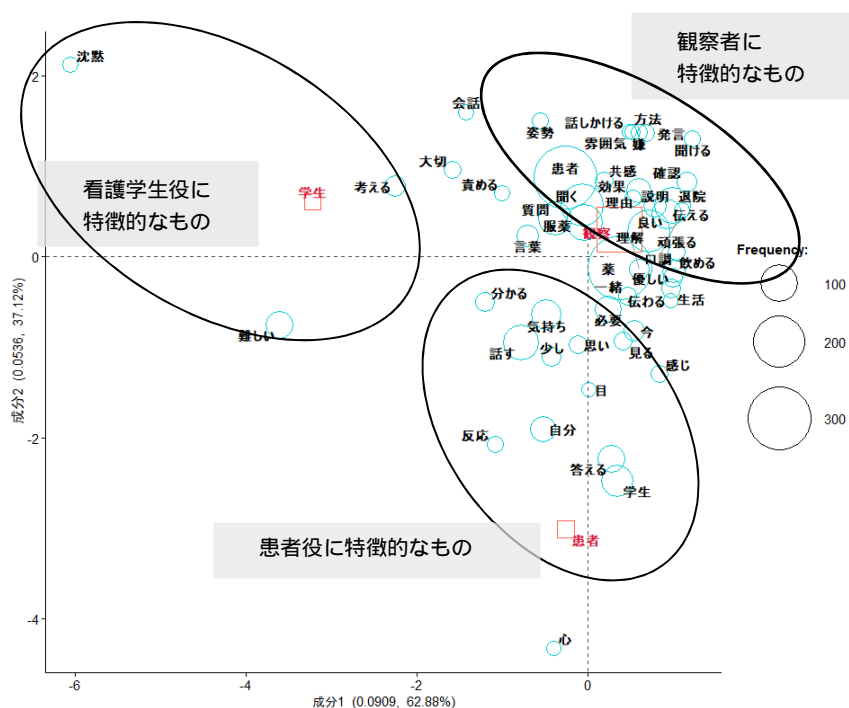


図 1. 学生の担当役割を変数とした場合の記載内容からの抽出語の対応分析の結果

対応分析の結果より、学生 (看護学生) 役、患者役、観察者のそれぞれの役割の方向に、3 つの領域に抽出語がまとまりをもって配置されている。つまり、それぞれの役割によって学生が考えた内容が異なる傾向にあることについて読み取れる。看護学生役では、「沈黙」「難しい」「考える」など、患者役は「心」「学生」「答える」「反応」など、観察者は、「発言」「方法」「聞ける」などである。看護学生役は自分の対応、患者役は患者の心理や反応、観察者は、患者と看護学生のコミュニケーションを捉え、会話の内容にも目が向けられていることについて読み取れる。

患者役を演じた学生からは、後半の回で「統合失調症患者」の役を演じることの難しさを象徴する抽出語が得られた。これは、回を重ねることによって、徐々に役に入り込み、役柄の視点を持つことができたからこそ感じられる「難しさ」であるように考えられる。またそれと同時に、そのような気持ちの患者に伝えることの「難しさ」についても考えるという客観的な視点を持つことについても推察された。

学生が患者役を経験することを通して、2回目以降では学生自身が『患者』という文脈の中に入り込み、その視点から看護学生(役)の対応や薬の内服についての患者の生活を捉えて理解し、対応していたことがわかる。『自分だったらどういう気持ちになるのか』という視点を持つことは、共感のDavisの概念の「視点取得」に相当する経験のように考えられる。

それぞれの学生が担当する役割による学びの特徴

a. 患者役を担当した学生のメモを分析した特徴

患者役を経験した28件のメモの内容についてロールプレイの担当回を変数として共起関係を Jaccard により上位 50 語について分析した。

1 回目の患者役では、「反応」(0.50)との関係が認められ、患者役としてどう演じたらよいかという戸惑いの内容がみられた。2 回目は係数が 0.30 以上のものは認められなかった。3 回目の場合は、「見る」(0.33)、4 回目では「後ろめたい」「逆」「触れる」(いずれも 0.40)、5 回目では「理解」(0.33)、「難しい」(0.30)、6 回目では「難しい」(0.30) 共起関係が認められた。3 回目以降では患者の役に入り込む視点からの気づきの記載の語が認められた。

b. 看護学生役を担当した学生のメモを分析した特徴

看護学生役を経験した学生から得られた 25 件のメモの記載内容について、患者役を担当した学生の記載と同様にロールプレイの担当回を変数として共起関係を分析した。Jaccard による分析の結果に係数の 0.30 以上のものを抽出したものを以下に示す。

1 回目の看護学生役では、「質問」(0.33)、「話す」(0.30)と関係があり、相手を知ることによって焦点が置かれていることが読み取れる。2 回目は、「服薬」(0.38)、「持つ」(0.33)、「少し」(0.33)、「話」(0.31)、「薬」(0.30)と関係が認められ、得たい情報を得るための会話についての語が抽出されている。3 回目は、「姿勢」「飲む」(いずれも 0.33)、4 回目は「多い」(0.40)となり、情報を得るではなく、やや踏み込んだ会話や指導に繋げる会話の中での切り出し方等に関する抽出語との関係もみられている。

c. 観察者を担当した学生のメモを分析した特徴

次に、観察者を担当した学生の気づき 210 件の記載について、対応分析の結果を図 2 . に示す。

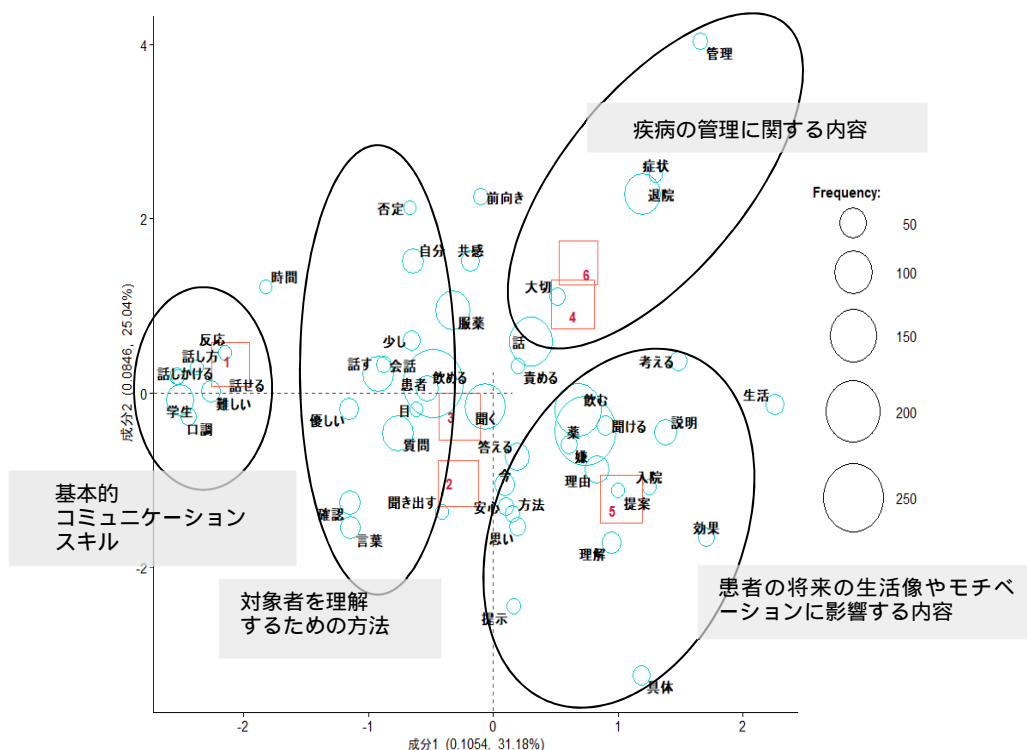


図 2 . 観察者の担当回を変数とした場合の記載内容からの抽出語の対応分析の結果 (最小出現数 10、上位 50 語)

全ての学生が複数回の観察者を担当しているため、その担当回を変数にして、対応分析を行い、特徴をとらえた。成分の説明率は成分1が31.18%、成分2が25.04%となった。

この分析結果を見ると、抽出語を大きく4つの領域にまとまりがみられる。1回目の付近には、「反応」「話しかける」「話し方」「口調」というような、対象者に向かうコミュニケーションに関する抽出語が近くに集まっており、これは観察者である学生が基本的なコミュニケーションスキルを意識していることについて読み取れる。2回目・3回目の付近、また0付近にあるまとまりでは、「共感」「否定」「聞く」「聞きだす」「答える」等がある。「否定」というのは《相手を否定せず...》という文脈で用いられている場合が多かった。これは対象の理解の仕方についてのまとまりであると読み取れる。4回目・6回目の方向にあるまとまりでは、「管理」「症状」「退院」が近くに配置されている。これは、疾病の管理についての抽出語のまとまりであると読み取れる。5回目の付近にあるまとまりでは、「生活」「効果」「理解」「説明」等があり、これは患者の目指す生活像やモチベーションに影響する抽出語であると読み取れる。すなわち、この結果と回数を経ることの経過を読み取ると、学生は初めのほうで、コミュニケーションスキルなどを読み取る傾向にあり、徐々に患者の気持ちの理解の仕方について考え、さらにロールプレイを繰り返すことで、疾病や薬の管理についての指導的な側面と、患者の将来に向けた生活や療養のモチベーションという側面について考えられていたことがわかる。

回数との共起関係を見たところ、1回目の「学生」(0.29)、4回目の「退院」(0.34)、5回目の「具体」(0.28)の3語が抽出された。

今回の結果において、患者役の学生も2回目からは、役柄に入っている様子がみうけられたこと、また看護学生役であっても、必ず観察者として4~5回は、観察することになり、役柄を演じる難しさや困難だけでなく、相手の状況についても推察できたことについて見えてきた。そのため、同一の課題(シナリオ)を繰り返すなかで、挑戦的な経験が可能になり、より複雑な課題についても、ディスカッション等を取り入れながら実施することの有用性について考えられた。

## (2) 指導者レベルにある看護師の患者との関係に関する意識の解明

研究参加者の属性：4名とも女性であった。年齢は40歳~50歳代であり、看護師経験は15年~33年、精神科における勤務経験はこのうち4年~27年であった。現在の職位はスタッフナースが2名、病棟主任以上が2名であった。全員が学生指導経験を有していた。KHCoderによる抽出語における品詞による取捨選択は、「名詞」「サ変名詞」「未知語」「形容詞」「名詞C」とした。

出現頻度5回以上の言葉52語について分析した。対応分析の結果、4名の看護師による個別の特徴を持たない言葉として「患者(患者によってちがう)」「自分(自分の感情、自分の思い)」「最初(最初からの工夫)」「強い(つながりや思いの強さ)」「ポイント：関わる際の自分の中でのポイント」「仕事：仕事時間以外の関係」「気(気をつける)」「(カッコ内は逐語録の前後の言葉の例、：は逐語から読み取られた言葉の解釈)等があがった。(説明率：成分1=39.38%、成分2=33.92%)

患者との距離の持ち方に関して、それぞれの看護師と患者との関係のあり方から考えと、看護師は自分の感情や自分の看護を意識しつつ、距離に関しては、ポイントとなるようなものを見つけて工夫をしていることについて考えられた。患者に対する対応に影響する「関係性」については、経験の振り返りなどを積極的に実施することや、ポイントや患者に対する感情という視点も踏まえて、コミュニケーションの持ち方を捉えることについて、課題が示唆された。また新人教育や学生においても、これらの視点を丁寧に経験していけるよう検討することも重要であると考えられた。

## <引用文献>

Anita W. Tools and Sheila R. Welt (Eds.) 池田明子ら訳(1996). ペプロウ看護論：看護実践における対人関係理論, 医学書院；東京

樋口耕一(2018). 社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して, ナカニシヤ出版；京都.

香月 富士日(2009). 精神科における看護師の患者に対する心理的距離の関連要因, 日本看護研究学会雑誌 32 (1), p105-111.

鈴木千衣(1998). 小児がん患者-看護婦関係における看護婦の心理的な距離感の構成因子と意味, 看護研究 31, p179-187.

Tuner, M (1999). Involvement or over-involvement? Using grounded theory to explore the complexities of nurse-patient relationship, 1 European Journal of Oncology Nursing 3:3 p153-160.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 河村奈美子, 町田佳世子, 岩本祐一	4. 巻 32-2
2. 論文標題 精神看護学におけるシミュレーション演習による看護学生の学びの広がり: テキストマイニングを用いた学生のメモの計量的分析から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 滋賀医科大学雑誌	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 河村奈美子, 岩本祐一, 町田佳世子
2. 発表標題 シミュレーション教育における同一課題の継続的学習による学生の学びのプロセス~気づきの内容のテキスト分析から
3. 学会等名 日本精神保健看護学会第29回学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Namiko Kawamura, Kayoko Machida, Yuichi Iwamoto
2. 発表標題 The changing viewpoints of nursing students on simulated nurse-patient conversations.
3. 学会等名 16th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Namiko Kawamura, Kayoko Machida
2. 発表標題 Development of perspective of nursing students through the simulated nurse-patients communication
3. 学会等名 The 32th International congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	町田 佳世子  (MACHIDA Kayoko)  (40337051)	札幌市立大学・デザイン学部・教授   (20105)	
研究 分担者	岩本 祐一  (IWAMOTO Yuichi)  (00734659)	大分大学・医学部・講師   (17501)	